

LGBTQについての理解を深める為に

菅野 「LGBTQについての理解を深める為に」というテーマでパネルディスカッションを始めさせていただきます。このテーマは、九月の中央教研で仏教界におけるジェンダー問題を扱いましたが、それに関連して、今、われわれが抱えている様々な問題について考えていこうということです。

よって、「LGBTQについての理解を深めるために」というテーマは、我々仏教者がもつと理解を深めなければならぬという問題意識ということ、今回のタイトルにいたしました。

本日は、パネラーとして四名の方をお迎えし、当研究所の顧問であります東京大学大学院教授の蓑輪顕量先生にコーディネーターをお願いし、進めさせていただきますと思います。

まずここで、パネラーの先生方をご紹介します。東京都立大学ダイバーシティ推進室特任研究員の藤山新先生、東京大学大学院教授の赤川学先生、こども教育宝仙大学教授の林隆嗣先生、それから当研究所研究員の菊岡妙光さんです。それでは、蓑輪先生、どうぞよろしくお願いいたします。

蓑輪 はい。ただ今、紹介にあずかりました、東京大学の蓑輪と申します。今日はコーディネーターということで、パネルディスカッションの司会進行役を勤めさせていただきます。

最初は、藤山新先生に、現在のLGBTQを取り巻く社会状況がどのようになっていのかを中心しながら、お

話をちようだいたいと思っております。

それでは、藤山先生、どうぞよろしくお願いいたします。

藤山 どうぞよろしくお願いいたします。東京都立大学の藤山と申します。

私は、東京都立大学で男女共同参画の推進や、セクシユアル・マイノリティーに関する理解啓発の促進、それから当事者のサポートに取り組んでいます。また、研究活動は、スポーツ分野です。「セクシユアル・マイノリティーの当事者がスポーツに参加する上での困難や課題を、いかに解決していくか」ということを中心的なテーマに、お話ししております。そういう立場から、今日は皆様方に、ぜひとも知っておいていただきたい基礎知識と、私の立場から皆様方に望むこと、という二点について、お話をさせていただきます。

まず、基礎知識の方からお話をさせていただきます。一口に「セクシユアル・マイノリティー」と申しても、その現象は非常に多様です。こちらに挙げているのも、ごくごく一部の事例にすぎません。レズビアンとかゲイとかトランスジェンダーとか、それぞれの現象がどのようなものかについては、ここでは触れません。ただただ、「とにかく一口に『セクシユアル・マイノリティー』と言っても、いろんな在り方があるんだ」ということを、ご認識いただければと思います。

この多様なセクシユアル・マイノリティーの在り方を、よりの確に把握するためには、私たち人間の性の在り方を四つの側面に分解して捉える、という視点が必要だということを、お伝えしたいと思います。

「性」と漢字で書いたらたった一文字ですが、実は四つに分けて考えることができます。私たちは普段、性とか性別と言うときは、大体「生物学的性別」という意味合いで使っているかと思えます。ですが、それ以外にも、例えば、「ジェンダー・アイデンティティ」、「性同一性」なんて訳されますが、自分自身の性別がどのようなかという認

識、確信という側面もございます。それから、「ジェンダー・エクスプレッション」、「性表現」と訳されますが、いわゆるジェンダーと呼ばれるものです。男らしさとか女らしさに関わる様々な事柄というものも、私たちの性を構成する大切な側面です。「セクシユアル・オリエンテーション」、「性指向」と訳されますが、どの性を好きになるとか、ならないとか。そういう感覚も当然ございます。

このように、一口に「性」という漢字たった一文字ですが、四つの側面から捉えることができるという視点をまず持っていたくことが、セクシユアル・マイノリティーという現象を的確に把握する上では、非常に大切になってくるということになります。

また、この一つ一つの側面に関しても、ただ単に「男性」と「女性」という二つの箱に、明確に分かれるものではなく、数直線のようなイメージをしていたほうが、私たちの性というものを、より実体に沿った形で理解することができるかと思えます。

つまり、非常に幅のある数直線の両端に、男性、女性という目安が立ったとしても、どこからが男性で、どこからが女性かという境界線は意外とはつきりしません。何か雲に包まれたような、もやっとした中で、「自分はこの辺」、「私はこの辺」という形で、何となく、それぞれが位置を取っている。そして、それが四つ重なって、その人の性の在り方というものが構成されていると認識していただくのが、私たちの性の在り方の実体に近いと思うわけです。

そう考えたときに、私は戸籍上では男性で、いわゆるセクシユアル・マイノリティーには該当しない。マジヨリティー側にいる性の在り方だとは思いますが、本日参加されている方の中でも、私と同じような男性は結構いると思います。では、私とその男性である皆さん方が、この数直線上の位置が全部きれいに一緒になるかと言ったら、多分、ならないです。細かく見ていくと、恐らく一人一人ばらばらだと思います。

つまり、セクシユアル・マイノリティーと言っていますが、マジヨリティー、マイノリティー以前に、「そもそも、

その人の性の在り方って、一人一人異なるものなんだ」ということを前提としていただきたいわけです。そのぐらい人間の性というのは、複雑というか、そもそも多様なものである、となるわけです。

では、そんなセクシユアル・マイノリティーに関する二つの略語をご紹介しておきたいと思います。一つめが「LGBT」という言葉で、これは皆さんもご存じかと思いますが、こちらは、レズビアン、ゲイ、バイセクシユアル、トランスジェンダーというセクシユアル・マイノリティーとされる現象の中でも、特に代表的な四つの現象の頭文字を組み合わせた呼称です。最近では、LGBTQ+とか、QAとか、QIAPKとか、いろんなアルファベットがつかってきますが、どのみちセクシユアル・マイノリティー全体を意味する言葉として使われていると、ご理解いただければと思います。

もう一方は、「SOGI」と呼ばれております。なかなかなじみのない言葉かもしれませんが。ソジとかソギと読みますが、これは、今ご紹介した性を構成する四つの側面のうちの二つの頭文字です。一つは、セクシユアル・オリエンテーション、どの性を好きになるとかならないとかいう側面です。二つめは、ジェンダー・アイデンティティ。自分の性別をどのように認識しているかという側面です。この二つの側面の頭文字を合わせた言葉になります。

つまり、いわゆるセクシユアル・マイノリティーというのは、セクシユアル・オリエンテーション、どの性を好きになるとか、ならないとかいう側面と、ジェンダー・アイデンティティ、自分の性別をどのようにに認識しているかという側面、二つの側面に関わる現象だ、という視点を示している言葉だご理解いただければと思います。

そういう視点で考えますと、LGBTと言ってしまうのは、どうしても現象ベースですから、セクシユアル・マイノリティーの当事者というのは、やはり「特別な人、別世界の人」みたいなイメージにつながりやすいです。けれども、SOGIという視点で見ますと、どの性を好きになるかならないかという感覚は、私も当然持っています。皆さんも一人一人当然持っていると思います。ジェンダー・アイデンティティとは、自分の性別がどうであるか。いちい

ち気にはしません、私も持っていますし、皆さんも全員が持っていると思います。

つまり、セクシュアル・マイノリティーと言ってはいるが、みんなが持っている感覚、側面の中で、比較的似通った人が多いか少ないかということの違いであって、別世界の人とか特別な人とか、異常とかではないわけです。

言ってみれば、人の性の在り方が、どのようなものが正常で、どのようなものが異常かという考え方は、もはやナンセンスであり、言うなれば、「どんな在り方も全て正常なんだ」というのが、このSOGIという視点からご理解いただければと思っております。

このSOGIという視点を、先ほど挙げた様々な現象に当てはめてみますと、やはり多様な現象の中でも、どの性を好きになるかならないかに関わる現象と、自分の性別をどのように認識しているかに関わる現象と、それぞれに違いがあるということも見えてくると思います。

例えば、「男性同性愛者であるゲイの人たちというのは、みんな自分が女性になりたいと思ってるんでしょ」というような誤解がよくありますが、ゲイとトランスジェンダーというのは別のレベルの話ですから、それは誤った認識なわけです。ゲイで、トランスジェンダーの方も当然いますし、ゲイでノンバイナリー、男性でも女性でもないという人もいますし、ゲイでストレートのシスジェンダー、男性だという人もたくさんいます。SOとGIは別のレイヤーの話だということもご理解いただけたらと思います。

では、そんな当事者がどのくらいいるのかというと、世界では人口の3%から8%ぐらいではないか、という推測がされています。日本においては、二〇一九年に、大阪市をフィールドに一五〇〇〇件を対象に行われたランダム・サンプリング調査で、回答者のうち三・三%がセクシュアル・マイノリティーの当事者と見られる結果が得られています。また、昨年には埼玉県でも、同様に一五〇〇〇件のランダム・サンプリング調査が行われ、ここでも全く同じ三・三%という数字が出ております。

この数字をどう読むべきか。三%ですから、一〇〇人に三人。三十三〜四人に一人ということになります。言ってみれば、「小学校・中学校・高校のークラスに一人は、何らかのセクシュアル・マイノリティーの当事者がいるのが自然だよ」という数字であると理解していただけるのがよいかと思えます。各クラスに一人ですから、学級委員と同じだけいる、ということですよ。「ごくごく当たり前にいるんだ」ということをご理解いただきたいと思えます。

と言ったところで、皆さんには、過去を振り返っていただきたいのですが、「自分の身の回りにセクシュアル・マイノリティーの当事者って、いたようには思えないけどな」とか、「自分は、まだ一度もそういう当事者と出会ったことがない」と思う方はたくさんおられると思います。むしろ、その方がマジョリティーだと思います。ただ、それは当然のことです。だって、その人がセクシュアル・マイノリティーの当事者かどうかなんて、外から見て分かるわけがないのです。人のセクシュアリティを勝手に外見から他人が決めるわけにはいきません。「いない」のではなくて、「見えない」だけなのです。

でも、今の三・三%という数字を頭に入れてください。見えないだけで、絶対に当事者はいます。まず、どんな場でも、「見えないだけにいる」ということを前提にしていただけだと私は思っています。

また、見えないのと同時に、社会的にマイノリティーであるだけに、「自分が、ここにいますよ」ということを伝える、声をあげることも難しいというのがマイノリティーです。ですので、私たちの仕事もそうですし、本日、皆様方一つお願いしたいのは、まだ見ぬ当事者、見えていない当事者が声をあげられるような環境、社会全体を変えるのは時間がかかるにしても、自分たちのいる場所ぐらいは、そういう環境にしたい。そう思って、私はいろいろな取り組みをしています。ぜひ、そこに力を貸していただければと考えております。

では、具体的に、どのようなことを皆様にお願ひしたいか。これは、「アライ」ということになります。「アライ」とは何かと言いますと、アライアンス、同盟を意味する言葉が由来と言われています。ここの文脈では、「セクシ

アル・マイノリティーという現象を理解しようとして、当事者をサポートしようとする気持ちがある人」のことを「アライ」と言うと思っています。

別に、アライであることに資格は必要ありません。気持ちだけあれば十分です。

本日ここに来ていただいた皆さんのように、「知る」ということが大切だと思います。セクシュアル・マイノリティーのことや、多様な性の在り方についての知識、情報に触れる、知ろうとする、そういう姿勢を持つことが重要です。これが、アライとしての第一歩であり、大切なことであると私は考えています。

仮に、「アライでありたい」と思ってくれた方には、踏み込んでお願いしたいのが、「アライを可視化する」ということです。つまり、セクシュアル・マイノリティーの当事者が外見では分からないのと同じように、この人がアライかということも、外見では分かりません。

では、どうすればいいかということが出てくるのが、先ほど三原所長のお話にもありましたが、「レインボー・フラッグ」というものです。これは、セクシュアル・マイノリティー当事者や、アライのシンボル、またはセクシュアル・マイノリティー当事者のプライド、連帯を示すためのシンボルとして、ギルバード・ベイカー（一九五二―二〇一七）というデザイナーが一九七〇年代にデザインしたものでございます。これにかかわるものを身につけていただくとか、置いていただくだけで、当事者にとっては重要なことです。

私は、職場のネームタグにレインボーのステッカーを入れていきます。私の職場では、三パターンぐらいの「LGBTFフレンドリー」というカードを作り、ネームタグの裏に入れたり、シールタイプにしてパソコンに貼ってもらったりという活動をしています。あとは、世の中にはレインボーカラーのリストバンドなどもあります。また、フライングタイガーという雑貨屋さんで、三〇〇円ぐらいで売っているトートバッグがあります。私は学内の移動のときにわざわざこれを持って歩いています。

知らない人が見たら、「おっさんが何か派手なもの持つとるな」程度で済んでしましますが、分かる方を見ると、「あ、ここには何か当事者がいるのかな。サポートしてくれる人がいるのかな」というサインになります。それだけでも、当事者にとってはすごく環境として変わってくるものですので、ぜひ、皆さんがアライになった時には可視化に協力していただけたらと思います。

最後に、本日ここにいらっしやる宗教に携わる皆様に対して私から望むことは、皆様でないとできないことに取り組んで欲しいということです。皆様だからこそできること、それは「寄り添う」ということです。やはり「寄り添う力」というのは、宗教に携わる皆様だからこそ、持っている力だと思えます。当然、相談を受ける私たちにもそういう力は必要ですが、宗教の専門家として皆様方が持っている力を、この場面で発揮していただきたいと強く感じています。

もちろん、全ての当事者が、何か困難を抱え、何かに困っているわけではありません。セクシュアル・マイノリティーの当事者は、弱者でもかわいそうな人でもありませんが、いわゆるマイノリティーであるだけに、やはりマジョリティーよりも様々な場面で困難に当たりやすいです。そういう当事者や家族や仲間、皆様方には寄り添っていただきたい。

また、お寺という場所が当事者にとって、「そのままでもいい場所だ」と感じられるような居場所となつてほしいです。可能であれば、困り事を解決するような仲間、専門家、セクシュアル・マイノリティーのコミュニティになげる。そういう存在であつてほしいなど、私は感じています。

「寄り添う」というところについては、皆様方のお力に期待して、私からは以上とさせていただきます。ご清聴いただきありがとうございました。

蓑輪 藤山先生、どうもありがとうございます。大変示唆に富んだお話でございました。

私たちがLGBTQという言葉聞きますと、どうしても、一つの感覚で捉えてしまいそうなのですが、四つの側面というところで性というものを捉えていかなければいけない。

私たちが多様であることを前提として、まず理解しなければいけないと、具体的な形で示してくださいました。ありがとうございます。

それでは次に、赤川先生にお話を頂戴したいと思います。実は、このLGBTQを考えていくときには、歴史的な背景、文化的な背景も知っておく必要があると思っております。

それでは赤川先生、よろしくお願いいたします。

赤川 ありがとうございます。ただ今ご紹介にあずかりました、赤川と申します。

大学では社会学を研究しております。実は、基調講演で三原所長が名前を出してくださいました橋爪大三郎先生が私の先輩で、先生の『言語派社会学』あるいは『性愛論』というものに影響を受け、セクシュアリティの研究を長らく続けてまいりました。

本日は、蓑輪先生がおっしゃってくださいました通り、歴史的な観点から現代社会で起きていることを振り返ってみたいと思います。

テーマは、「アイデンティティへの自由、アイデンティティからの自由」です。これは最後の結論として申し上げます。たいことでありましたが、あえて最初に言わせていただきます。時間が足りなかったら、この結論だけ言って終わりにしたいと思っております。

さて、LGBTQとSOGIにつきましては、既に藤山先生から十分なご説明があったと思いますので、軽く触れ

るにとどめておきたいと思います。

そもそも、この概念が出てきたのは約十年前になります。欧米の方では歴史がありますが、日本では、やはり二〇一〇年代ぐらいになってからだと思います。それまでは、セクシユアル・マイノリティーやレズビアン、ゲイというのは、別の名前で呼ばれてきて、それが、LGBT、LGBTQと呼ばれるようになってきたという歴史があります。これが、アメリカでは更に細分化されて、LGBTQのQの後にIAA P P O 2 S というようなものが付いたりします。それぞれの概念は、インターセックス、それから、アライ、アセクシヤル、パンセクシユアル、ポリアモラス、オムニセクシユアル、トゥー・スピリッツなどいろいろあります。その一つ一つについて説明する時間はないので、次に行きます。

こういうカテゴリーは、先ほど藤山先生が「性は数直線だ」とおっしゃってくださいださったと思いますが、それに対応する形で非常に増えていく傾向があります。もっと言えば、細分化、細化していくという方向性なのだろうと思います。では、なぜ細分化されていくのか、これが一つポイントになります。

一方、S O G Iの方ですが、訳語としては、「性的指向」と「性自認」というふうに使われています。ただ私は、この領域の研究をしていく中で、この訳語自体もやはり変わってきたな、と思うところがあります。

例えば、「セクシユアル・オリエンテーション」を、今は「性的指向」、「指」の「向かい」というふうに書きますが、これも数十年前ですと、趣味嗜好の「嗜好」、プリファレンスの「嗜好」という表現をしていた方もかなりいたと思います。あるいは、「志す」の「志向」、「志向性」と言ったときの「志向」という表現をされていた方もおりました。どの漢字を使うかで、若干意味合いが違ってくるわけです。特に、趣味嗜好の「嗜好」や志すの「志向」というのは、要するに、セクシユアル・オリエンテーションは意思の問題だったり、趣味の問題であるから、「本人の選択だ」という議論が多いわけです。

これに対して、「指」の方の「指向」というのは、例えば、「同性愛は性的指向だ」と言うときに、「それは、本人の意思によっては変えられないんだ」という意味合いを持ってきます。「そちらの方の言葉遣いをする方が正しいんだ」と言葉遣いをめぐる争い、のようなものがあつたように思います。

さらに現在では、「ジェンダー・アイデンティティ」という言い方をするときに、「性自認」という言い方をする人が増えてきています。この場合は、「性別」というのは、自分で選択できるものなんだ」という意味合いが強くなっていくわけです。

他方で、「性同一性」という表現も伝統的に存在し、その場合には、「自分は男性だと思うか、女性だと思うか」というアイデンティティの問題として使われていました。

「LGBTQは、人のカテゴリーを表す「誰」の問題。それから、SOGIの方は、全ての人の持つ属性とか特徴で、「何」の問題だ」というまとめ方をした方がいて、素晴らしいと思っっています。

ただ、歴史的に振り返ってみますと、同性愛という行為、あるいは、異性装、女装や男装という行為自体は、皆さんがご存じの通り昔からあります。今年出版された本に、山口志穂さんの『オカマの日本史』という本がございます。ご本人がオカマという表現を自分に当てはめているので、ここでもその表現を使います。それを見ると、ヤマトタケル、空海、興福寺菩提院、白河上皇、藤原頼長、後白河法皇、足利將軍家、戦国武將、徳川將軍、若衆歌舞伎、陰間茶屋など、社会のあらゆる階層で、同性愛の行為は広く行われていて、それが特段異常だとも、おかしいとも思われていなかったと、非常に懇切丁寧に書かれている本です。

これが、今の社会に向けて、どう変化してきたのか、氏家幹人先生が『江戸の性風俗』（講談社現代新書）という本をお書きになり、その本で「江戸と大坂の男色文化は、江戸後期から末期にかけて衰退してきた」とおっしゃって

います。

これがなぜかと申しますと、戦国武将の男色というのは、要するに、戦場で命を懸け合う関係としての男と男の絆という意味合いが非常に強かったわけです。これが江戸時代になり、戦争がなくなって藩士や武士が一種の官僚化していくわけです。その中で、各藩からも男色の禁止令が出たりします。それから、女性も徐々に華美になっていき、文化としての男色が徐々に衰退していったのだと、氏家先生は指摘しています。

現代の我々に直接関係のあるテーマとしては、セクシュアル・マイノリティが、なぜ差別されるようになってきたのか、ということです。これについて、私はやはりヨーロッパから入ってきた様々な性に関する考え方、性に関する科学や医学というものの影響が非常に大きかったと思います。

端的に言いますと、同性愛を変態性欲とか性倒錯と捉える議論が成立し、当時は欧米の学問の影響力というのは非常に強かったのです、そういう考え方を日本人は受け入れていきました。そのことによって、現在に至る性的少数者に対する差別が成立してきたと私は思っております。

このことと同時に、「同性愛者」というカテゴリーと言いましょいか、アイデンティティ。「自分は同性愛者である」という意識を持つ人が非常に増えてきた、ということになるのかと思います。

このアイデンティティの問題というのは、突き詰めていくと深い問題で、「自分が何者なのか」ということであります。これは「自己の存在証明」と言ったりしますが、「その自己のアイデンティティが、セクシュアリティによって規定されていくようになった。これが近代社会なんだ」という議論を、フランスの哲学者のミシェル・フーコー（一九二六～一九八四）という人がしています。実は、他にも選択肢はあり得たわけで、例えば食べ物の好みで自分を何者かと認識する。そういう社会もあり得たはずです。我々の生きている社会は、おおむね「性」によって、自分が何者かを判断している、そういう社会なんだという指摘をしています。

それから、先ほどからも出てきますが、「性差とか性的指向というものが社会的に作られたものであって、だとすれば、教育や社会によって変えられるかどうか」という論争も、盛んになされてきた歴史があります。

そうしますと、セクシュアル・アイデンティティ、「自分が性的に何者か」という問題が政治の争点になってくる、これを「アイデンティティ・ポリティックス」と言ったりしますが、そういう特徴を持っているのが私たちの社会であると理解することができると思います。

次に、政治的論点についてお話しします。アメリカの場合は、同性婚を合法化するかどうかということが、各州において大きな論点になります。

日本では、皆様をご存じの通り、LGBTQに関する差別を禁止する法律を作るか議論になっております。LGBTQという存在が社会にいるということを認めて、そういう人たちに対する理解を増進していこうとする理解促進なのかというところで、与党と野党の対応が分かれており、これが大きな争点になりました。

こういう議論をするときに、特定の政治的立場によって変わってしまうところがありますが、一つ大きな違いは、「LGBTQの当事者以外、つまり異性愛者は社会における加害者とか抑圧者であって、そういう人たちがセクシュアル・マイノリティーを差別することを、法律的に禁止するべきなんだ」という議論になるか、あるいは、「政治的立場の右左を越えて、共通点や合意点を見いだすことができるのか」という認識の違いになると思います。

いわゆるリベラル側の方でも、東アジアにおいても、保守派に対する説得が行われてきました。例えば、台湾にオードリー・タン（一九八一〜）という優れた政策立案家がありますが、彼は、「結婚不結婚」という表現をしています。これは、台湾において同性愛、同性婚が合法化されるときの一つのレトリックだったことがよく知られています。

婚姻の「婚」の方は二人の個人を結ぶもの、それから、婚姻の「姻」の方は二つの家族を結ぶものという考えです。そして、台湾で行われた同性愛の合法化は、婚姻から「姻」の方を除く、つまり家族と家族の結びつきという側面を

除いていくという形で保守派を説得したことが知られているわけです。

このような取り組みが、欧米でどうなされてきたのかを少しご紹介させていただきますと思います。

一言で言うと、リベラル派による保守派の取り込みということになりますが、どうやって合意点を作っていくか、という話でもあります。

実は、欧米でも同性婚に反対する勢力は、宗教的・神学的な理由から、「婚姻は生殖を目的とした男女に限られる」と考える人々や、「同性婚は異常を正常化する試みだ」と捉える保守派の人だけではありません。例えば、従来の婚姻、男女関係に、性支配や性暴力の根源を読み解くラディカル・フェミニズムという、フェミニズムの中でも最も原理主義的な方々や、一対一の排他的・固定的な関係以外の性関係を希求する急進派も、同性婚の推進に対しては非常に冷淡だったことが知られています。

こういう方々は、「同性婚は、ある種の同性関係を他の関係よりも上位に置き、性の急進主義が企図する反体制的で侵犯的な可能性に欠け、特定のカップル関係を正常とするが故に、同性婚に反対する」と言われています。

他方で、シビルパートナーシップや同性婚を支持する人々というのは、家族を形成する責任と、同性婚が社会にもたらす善や効能、効用を重視します。責任のレトリックを強調した、とも言えます。

例えば、フリードマンという人が編集した『同性婚』という本がありますが、次のような言い回しが多く見ることができます「同性カップルは家族と常に形成し、これからも、そうするだろう。家族が栄えると、地域が栄える。地域が栄えると、国家が繁栄する」。こういう言い方です。

それから、保守派でも、「ゲイとレズビアンが、『政府は自分たちの生活に大きな影響を及ぼすべきでないし、家族とコミュニティを強化するために、自分たちができることは何でもやる』と述べているときに、彼らが結婚する自由を、どうして拒否できますか」という言い方になるわけです。つまり、共和党の方は、「政府は小さくあるべきだ」

という考え方を支持していますし、一方で、「家族とコミュニティを強化するために、自分たちにできることは何でもやる」と言っている方を、その方が仮に性的少数者であっても拒否はできないだろうというわけです。そういう形で納得していくプロセスがあったと言われています。

つまり、異性愛、非異性愛を問わず、「関係そのものを強化したい」というコミュニティ的な情熱です。コミュニティアンというのは「共同体主義」と訳されることが多いですが、「そういう情熱は、伝統的な異性婚を守ることよりも優先される」とも言われています。

ここで生じているのは、LGBTQによる家族や社会へのコミットメント、つまり責任の引き受けであると同時に、保守派からも賛同を引き出す一つの言説戦略だった、と見ることもできると思います。

これを、サリバンのという学者に言わせれば、「結局は、道理にかなった考え方が勝利した。保守派の主張は、ゲイであっても人としての責任、家族、軍に従事する機会が大切であると考え、宗教的かつ神学的な理由から状況の改善を拒もうとする右派の流れを差し止めた。そして、市民の平等と社会統合を打ち出したリベラル派の主張は、同化と規範的な社会風潮に対する左派の不信感に打ち勝った」となります。

要するに、左右両極に原理主義はあるが、その二つから距離を取って、同性婚の賛成派と反対派で共有できる価値の範囲を広げていくことが肝要であるということが、示唆されるのではないかと思います。

最後に、このような問題を考えるときに、私自身は「自由」と「権利」、二つの側面があるのではないかと考えています。

一つは、「〇〇への自由」という側面です。今の場合で言うと、「アイデンティティへの自由」、あるいは、「アイデンティティへの権利」です。つまり、ある特定のアイデンティティを持つことの自由です。それを、国や社会が公認しないし、承認されることで得られる自由も重要なことだと思えます。寄り添う力というものも、そこで試されるのだと

思います。

他方で、「そういうアイデンティティに縛られない自由」もあると思います。「特定のカテゴリーを生きない自由」と言いますか、そういう人たちの自由も、同時に尊重されなきゃいけないと思うわけです。

その二つの自由が尊重されるというのが、社会において、具体的にどういう形でありうるのかを、社会学者としては考えていかなきゃいけません。このあとも、皆様とディスカッションさせていただければと思っております。以上でございます。

蓑輪 赤川先生、どうもありがとうございます。分かりやすく歴史的な展開と、現実の社会の中で、どう受け止めていくのかというところをお話しいただきました。「言説の上での戦略」というお話でしたが、大切な部分なのではないかと思いました。

また、最後にまとめてくださいましたが、「獲得する自由」と「縛られない自由」。これも大事なポイントなのではないかと感じました。

それでは次に、実際に私たち日蓮宗の僧侶として、あるいは「仏教」という視点から、この問題を考えるということも大切なことではないかと考えています。

そこで、原始仏教を中心に研究しておられます林先生に、お話をお願いしたいと思います。

それでは林先生、どうぞよろしくお願いいたします。

林 どうぞよろしくお願いたします。私からは、「初期仏教とLGBTQ」というトピックで、お話をさせていただきますかと思っております。

昨年、全日本仏教会でLGBTQに関するシンポジウムが開かれました。さらに、先ほど三原所長、あるいは藤山先生にもご紹介していただいた通り、仏教界でも多様な性のあり方を尊重し受け入れる環境づくりを推進していくことを目指して、寺院に掲示するためのステッカーなどが作られたりしています。偶然ではありますが、仏教の旗とレインボー・フラッグ、非常に似ています。数日前には、なでしこジャパンのトランスジェンダーの選手が、アメリカで女性と結婚したということも話題になり、LGBTQに関するニュースを以前と比べてよく目にするようになりました。

こうした社会の動きの中で、お寺では、同性愛カップルの結婚式や、トランスジェンダーの方のお葬式、お墓や戒名など、具体的な対応を求められることがあります。あるいは、「仏教ではどう考えるのか?」、「宗派としてはどう考えるのか?」ということを問われたりするかもしれません。

私自身は、今ご紹介いただきました通り、初期仏教、原始仏教のパーリ仏典の文献を研究している者で、普段は上座部仏教のテキストの成立史、教義解釈の研究などをしております。LGBTQの専門家でも当事者でもない立場で、こうした問題に、訳知り顔をして「仏教では、こうである」「こうあるべき」と明快な答えや提言などを示すことはできませんが、パーリ仏典に基づいて人間を分類していくことについて考えてみたいと思っております。また、先生方のご意見をお伺いして、勉強させていただきたいと思えます。

LGBTQの議論は、個人の心と体の問題や偏見、差別といったセンシティブな問題にも関わってきます。あるいは文脈上、男女のジェンダー問題よりもっと踏み込んだ、性行為や欲望、性欲に関わる生々しい問題も扱ってしまうかもしれませんが、ご容赦いただければと思います。

では、始めさせていただきます。まず、性に寛容な古代ギリシャと違い、古代インドの文献では、カーマーストラや特殊な性愛文献を除いて、一般的に性行為の問題が大っぴらに論じられることはほとんどありません。初期仏教の

文献を調べてみますと、教団の規則集である律蔵において、出家できない人のリストの中に、両性具有者という性的マイノリティーの方の言及が見られます。こうした人の排除というのは、男女でルールが異なる教団の運営上、「比丘なのか、比丘尼なのか、区別がつかないと困るから」という便宜的な理由があるのかと思います。一方、このリストの中に同性愛者は言及されていません。

また、律蔵の中にあるルールとして、「これを破ると教団追放になってしまう」という波羅夷罪という罪が定められています。その第一条では、性行為が禁じられています。条文解釈を見えますと、誰とどんな行為をすると罪になるのかといった成立条件、あるいは細かな事例が検討されているわけですが、その中に同性との性行為も組上に上がっております。

これに関して、漢訳の形で伝わっています摩訶僧祇律の中に、男性同士での具体的な性行為のエピソードが語られています。「ある比丘が、托鉢のために町に入っていくと、男性の在家信者に誘われて性行為を行ってしまった。それで、波羅夷罪になる」というエピソードです。

一方、女性出家者の場合は、淫戒として同性間の行為が想定されていないようですが、公の懺悔で許される波逸提という罪の中で、女性同士のペッティング行為、愛撫が禁じられています。

しかし、こうした記述は、同性愛だから禁止というわけではなく、元々同性だろうが、異性だろうが、出家者にとって性欲求というのは捨てるべき煩惱であり、出家者にとっては、自分へのこだわりも煩惱として、男性らしさ、女性らしさといった自意識、あるいはトランスジェンダーのアイデンティティといったものすらも、捨てていくべきものと思うわけです。

一方で、パーリ仏典には、在俗、世俗の生活者に向けた社会倫理に関する教えが散見されます。そこでは互いに尊重し合って、いたわり合うことが大切なこととされ、基本的には、性行為について指針を示すようなことはありません。

ん。家庭における夫婦あるいは親子の愛情に言及したとしても、子孫を作っていく男女の関係だけが社会的な価値があるという差別的な見方、あるいは、産めや増やせやといった国家の発展や拡大を目指す、そういった価値観も特に見られません。同性愛をことさら取り上げて、是非を問うようなこともありませんし、性的なマイノリティーへの偏見やバラモン教的な浄、不浄の観念で性を論じたりすることもありません。「同性愛というのは、悪業で、地獄に落ちるぞ」といった脅しもありません。

次に、人間の分類について考えてみたいと思います。性的なマイノリティーを考えるときに、分類の細分化も一つの課題になります。恐らく、元々はレズビアンとゲイを対象としていたものに、トランスジェンダーが加わり、LGBTというカテゴリーになり、最近ではLGBTQやLGBTQ+が一般的な表現かと思いますが、先ほど、赤川先生が紹介されたように、LGBTQIA、LGBTQQIAAPとか、様々な細かい分類もあるようです。

仏教には、この世界のあらゆる存在や事象を徹底的に分析するアビダルマという学問的な分野がありまして、生き物も要素に分解して、カテゴリーを立てて、詳細に分類整理していきます。「人施設論」という、人間の分類だけを扱うアビダンマ文書では、人間を五十四種類のタイプに分類して、更に細かなカテゴリーを設けて、緻密に分析していきます。しかし、この中にはLGBTQに関連するような分類はおろか、男女の分類すら検討されていません。

仏教が人間を見つめる指標は、その人の生き方や心の問題、あるいは人格のレベルといったことであって、人間を見るときに、その人の心が安定しているか、苦しんでいるかは大事なことだが、その人のジェンダーとかセクシュアリティといった属性は、ある意味、無関心なフラットな見方をしていると言えるのではないのでしょうか。

次に、「異質な他者と平等性」について考えてみましょう。分類には善し悪しがあり、される側にとつては他者と一緒くたにされて、そこに自分が押し込まれることに違和感を覚えていたものが、特定の名称がついて練引きされることで自分に居心地のいい居場所が認められたような安心感が得られます。けれども、それによって壁を作ってしまう

ったり、あるいは、他者を排除するようなことになってしまったり、対立を起こしてしまいう危険性もあるのではないでしょうか。

自分と異なる他者、異質なものと関係を作っていくときに、二つの態度が考えられると思います。一つは、異なるものとして尊重する態度。もう一つは、そもそも異なるものと見なさないという態度。「みんな違って、みんないい」という言葉は、個性や多様性を肯定するシンプルで非常に力強いメッセージとして、誰もが知っている金子みすゞさんの詩の一節です。

例えば、男性や女性を一括りにして、「男だから」、「女はこうあるべき」と押しつけるのをおかしいと思うように、LGBTQも、一人一人の背景や経験や考え方が違うのだと思います。「ゲイはこう思うのだ」、「トランスジェンダーだったらこうあるはずだ」と考えるのは、偏見や押しつけです。LGBTQも、それ以外にも、みんな違う。「みんなそれぞれが違う」という認識に立つことが大切ではないかと思う次第です。

それから、多様性を認める社会というのは、自分が嫌悪する他者の存在が認められる状況でもあると思います。なじみのない相手を「変な人だな」と思うのは勝手ですが、それで攻撃をしたり差別をしたりするのは間違いです。

一方で、自分の要望を受け付けない相手を抑圧者と見なして、相手と争い攻撃的に解決しようとする、そこから反発や分断や対立が生み出される危険性があります。憎しみや怒り、恨みに根ざした暴力の連鎖については、有名な『ダンマパダ』の「怨みに報いるに怨みをもつてすれば、怨みがやむことはない」という名言がございします。

それでも折り合いをつけずに闘い続けるという運動家の考えもあるかもしれませんが、そこで傷ついて、引き裂かれて苦しむ人々を置き去りにするような運動というのは、広い賛同を得られないと思います。

だから、「自分と他者とは互いに違う。みんな違うんだ」という前提での寛容さ、相互の理解を広げることが、大事ではないでしょうか。

もう一つの態度は、「異なるものと見なさない」というものです。仏教の平等心（サマツタ）という言葉は、物をフラットに捉える心を意味します。個人的な感情に左右されず、心を動かされないで、男だろうが女だろうが、子供だろうが年寄りだろうが、身分の違い、あるいは、障がい者だろうが、外国人だろうが、LGBTQでも、どんな相手でも区別なく寄り添うし、誰も差別せず誰も特別扱いしない。

仏教の平等思想の基本コンセプトは、「一切衆生」という言葉にあつて、人間に区別がないどころか、「あらゆる生き物」という意識が根底にあります。『スッタニパータ』に「一切の生きとし生けるものは幸せであれ」とあるように、全ての生き物を不当に傷つけず、だましたり、蔑んだりせず、尊敬や愛情の念を持つて接することが求められます。

一切衆生を等しく見るというのは、他者との普遍的な一致点に注目して、共通点から認め合うということでもあると思います。仏教では、衆生を「五蘊の統合体」と捉えます。自意識を解体するために、一旦、自己存在をばらばらにして、「私は人間だ」、「私は○○だ」というアイデンティティが、仮名、概念にすぎないと理解していくわけです。多様な要素で構成されて、それが調和を持つて保たれれば安定して生存できるのが人間であつて、同性を愛したり異性を愛したり、どちらも愛したり愛さなかつたりするだけで、自分も他人も同じ痛みを持った人間なわけです。『スッタニパータ』には、「自分と他者は同じだと思つて、自分に当てはめて殺してならない」という有名な詩もあります。誰かに性的な魅力を感じ、欲情する心に違いはありません。確かに仏教では、欲情とか愛執が相手や自分を傷つけ、苦しめるということを説き、また、快楽に溺れず自分をコントロールすることを説くわけですが、それは全ての人間に当てはまる教訓です。一方で、好きな相手のことを愛する気持ちというのは、あらゆる立場や生き物の種別すら越えて等しい、と明言している仏教話のジャータカのエピソードがあります。あるオウムが、サリカーという別の種類の鳥に求愛すると、種が異なるということで断られますが、めげずに説得します。どんな組み合わせの力

アップルでも、愛に違いはありませんというわけです。

誰かが誰かを愛する。それには、それぞれの愛の形があるわけで、どんどん細分化されていくと、LGBTQだけが特別枠の異質な他者というわけではなく、藤山先生がおっしゃられたような、数直線のどこかにみんなが位置する、レインボーの色分けも外すことができるのではとも思います。

そして最後に、「人間の多様性」ということで、仏教の「縁」という視点で考えてみますと、このように存在する多様な人間の分類、区別というのは、固定的な枠組みではなくて、関係性によって暫定的に作られた結果にすぎないわけで、多数派とか少数派、強者や弱者といったことも、相対的な関係性の中で生まれる観念と言えます。

いまの物事の在り方は縁によって現れてきたものであり、しかも、尺度や条件が変わればその関係性も変化して、物事の在り方も異なってきます。一人の人格を構成する多様な要素の一点にスポットを当てて、相手や自分をレッテルづけて、アイデンティティを規定してしまうことは、仏教ではしません。

また、仏教には「無我」という考え方があります。赤川先生が先ほど「アイデンティティからの自由」というお話をしていたきました。性を自分のよりどころにして規定した、その自己存在への執着が自己を縛って苦しみを産むという考え方を当事者につきつけるのは酷かもしれません、ブツダの知恵に立ち返ると、その解放が救いや癒しのヒントになるのかもしれない。

多様性社会の中で、「それぞれみんなが違う」という認識を持つ。LGBTの中には、いじめを受けた人、差別され苦しんで心を病んでいる人、あるいは、不快感や怒りが充満して自分にも他人にも攻撃的になる人もいれば、世の中をうまく渡り歩いている人、温かい人間関係の中で生きている人もいるはず。法律や社会制度というのは、一括りに適用されるものですが、「悲しい、苦しい」といった心の痛みというのは千差万別です。心の痛みを抱えている人がいたら、それぞれの痛みの原因を解きほぐして、心の安らぎを得る道を示すのが、宗教の役割や意義だと思

ます。

生きづらさを訴え、道を求める相手に寄り添い、その人にふさわしい方法を示すというのが、ブッダの対機説法です。そして、一人一人が自分で振り返って、気持ちの根っこにあるものに気づいて意識を変えていくことで、それぞれにふさわしい安らぎに至るとというのが、初期仏教の救いの形だと思えます。初期仏教の視点からLGBTQを考えるなら、こうしたことが基本になるのではないのでしょうか。

駆け足でお話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

蓑輪 林先生、どうもありがとうございます。初期仏教の視点からどう考えるかということ、林先生にお話いただきました。

お話に出てきた「異なるものとして尊重するのか。異なるものと見なさないという選択をするのか」という言葉、これは初期仏教の考え方からすると、「異なるものとして認めて、尊重していくという方向に行く」と理解しているのかと感じました。つまり、一人一人が多様な痛みや苦しみを抱えているということを認めて、その一人一人に応じた多様な安らぎがあるというのを、私たちがきちんと心の中にとどめておくということにつながっていくと思いがら拝聴させていただきました。

それでは最後になりますが、本宗の僧侶でいらつしゃいます菊岡妙光さんから、ご本人がいろいろと調べられたことを中心に、宗門の様々な問題点も含めてご報告いただきたいと思います。

それでは、菊岡上人、よろしくお願いいたします。

菊岡 よろしくお願いいたします。

私は、現代宗教研究所でLGBTQの研究に携わらせていただいております。今回は、「LGBTQについて法華経「提婆達多品第十二」から学ぶべきこと」というテーマで発表させていただきたいと思います。また、先生方から、いろいろ教えていただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

ひろさちや先生が監修された書籍の中で、「仏教とは何か。大きな乗り物で全ての人々を救うことを目的としたのである」と語っています。また、日蓮宗テキストの『仏教の教え―釈尊と日蓮聖人』の中で、「釈尊は王子の頃、人生に対する苦悩を内に秘めていた。人は青年期に誰もが一度は感じる人生に対する疑問や絶望を乗り越えるために、内なる自己に何かしらの言い訳をしながら、自己存在を社会の中で適用させようとする。しかし、釈尊は、その問題に真っ向から取り組んでいった。人が生きることが苦しみであるという大前提の問題を解決しようとする姿勢が、それまでの修行者には得られなかった境地に導いたと言えるだろう」とあります。

現代に生きる人は皆、何かしらの苦しみを抱えて生きています。その苦しみから救ってくださるために、お釈迦様は、私たちに教えを残し伝えてくださいました。それなのに、仏教の「女性はブツダにならない。女性は男性に変身しなければ、悟りを得ることができない」という経文が女性差別的とも捉えられてしまいます。そして、その都度、妙法蓮華経提婆達多品の中の女人五障説、変成男子が取り上げられてしまいました。

果たして、苦しみから救ってくださろうとしていたブツダが、釈尊の御心を明らかにされた經典である法華経に、差別という苦しみを生む教えをお説きになるでしょうか。LGBTQは、男性・女性という性別を超えた問題でございませう。この問題に向き合うために、法華経、そして提婆達多品は差別的な教えは説いていないことを、改めて確認し、納得しておきたいと思えます。

「五障」と「変成男子」について調べてみました。日蓮宗事典によると、五障とは「女性が持っている五種の障害。女性は、梵天王、帝釈、魔王、転輪聖王、仏身の五つになれないものとする」。二つめの意味としては、「修道上の障

害となる五種のもの。煩惱障、業障、生障、法障、所知障の五つ」とあります。他に、『デジタル大辞泉』や『ブリタニカ国際大百科事典』、『世界大百科事典』の中には、先の二つの意味に加え、三つめとして「欺、怠、瞋、恨、怨の五つ」が加えられています。

「障り」の意味としては、「都合の悪いこと、差し支える、妨げ」という意味がございませうから、女性が仏になるには、都合の悪いことや妨げになることは五つあるということです。今回は、この妙法蓮華經の提婆達多品第十二の中で、舍利弗が龍女に言った、「女人の身には、なお五障あり。一には梵天王となることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり」の「五障」の中身を調べてみようと思いました。

「五障」の意味について解釈しました。ここは簡単に説明したいと思えます。「梵天王」というのは、バラモン教の聖典ヴェーダで語られる根本原理で、中性的なブラフマンのことです。ヒンドゥー教では、ヴィシュヌ、シヴァと並ぶ三神の一つに数えられる、とあります。「帝釈」は、阿修羅と戦う勸善懲惡の神で、ヒンドゥー教のインドラ神が取り入れられました。「魔王」というのは、仏道修行を妨げる第六天魔王波旬のことであり、人が善事、よいことを成そうとするとき邪魔をします。マラー・パーピーヤスは、天魔波旬、魔羅、天魔、惡魔などの漢訳があつて、煩惱の化身とされ、釈迦が悟りを開くことは自身の破滅につながるので、釈迦の修業の邪魔をしたというものです。「転輪聖王」が、天下を円満に治めるインド神話上の理想的な君主です。「仏身」は、提婆達多品の中から出しましたが、無限に近い時間、ずっと難行苦行し、功德を積み重ね続け、非常に苦心し悟りを得て、仏になられたお釈迦様である。ここでは、歴劫修行の仏ということを出させていただきます。

ここから、梵天王はバラモン教、帝釈はヒンドゥー教、転輪聖王はインド神話上の神ということがわかります。天部と言われる仏教に入った神々のほとんどは、ヒンドゥー教の神であり、仏の世界を守る仏教の守護神となったときられています。仏教が古代インドの宇宙観、インドの土着信仰であるバラモン教の影響を受けているように見えます。

「女性が仏になれない」という教えも同じように影響を受けているが故に、法華経に加えられてしまったのではないだろうか。

香月拓氏の論文には、「釈尊在世の時代におけるインドは、バラモン教の概念が広まり、インド社会特有のカースト制度が定着しはじめたところである」とあり、「仏教学では、法華経は紀元一〜二世紀頃にインドで成立した経典」とあるので、法華経がバラモン教の子孫の影響を受けていることに矛盾はないのでしょうか。

そして、ヴァルナ制度が確立し、浄・不浄感の発達に伴い、不浄とされる行為を行う人々は賤民として最下位に位置づけられました。女性もまた、「血で大地を汚すもの、汚すもの、男性主導者を惑わすもの」などという理由から不浄な存在とされてきました。

バラモン聖典は、女性について、「女性たちは、賢者をも愛欲と怒りの力に従わせ、悪しき道に導くことができる。女性は決して、その父、夫、あるいは息子たちより離れることを求むべきではない。なぜなら、彼らを離れることによって、女性は自らおよび夫の家族をも卑しむべきものとする」と記しています。そして、女性差別的な思想はバラモン教からの流れということが垣間見えます。

ここで、現在のインド女性に対する慣習を見ていきたいと思えます。今、インドではダウリーという風習があります。これはどういう風習かというと、女の子が生まれると、その家の経済的負担が大きくなることから、多くの貧困家庭では、女の子を妊娠していることが分かった時点で中絶し、生まれてきた女兒は、アヘンを使うか、砂やマスタードの種の入った袋を押し当てて窒息させるなどして殺してしまいます。

次に、ヒンドゥー教の古い慣習の一つであるサテイーというものがあります。夫に従順な妻が夫の死後、殉死することが美徳という考え方で、女性の人格は認めておらず、一八二九年まで、妻が焼死することをいとわないとされています。

そして、ガオコルという風習は、月経中の女性は不浄だとする考えで、月経中の女性を見ただけで「不吉だ」と考える男性もいます。また、その女性は、人に会わなくて済む別の場所で、月経中は過ごさなければならぬそうです。ジェンダー平等がうたわれる現代でありながら、インドではすさまじい女性差別があります。現在でこのような現状なのだから、釈尊在世や法華経が成立した頃は、「女性は仏になれない」という女性に対する固定観念や思想、偏見が、人々の心の奥底まで深く根づいていたのではないのでしょうか。

舍利弗は、バラモン出身であるから、このような固定観念や偏見が染みつき、その先入観から抜け出すことができなかつたのかもしれませんが。

工藤美和子氏の『平安期における女性と仏教について―願文を中心に』の中で、「經典に記されていた、一見すると女性蔑視的文言、例えば「五障」や「變成男子」は、仏教による女性差別を意味するものではなかつた」としておられます。

そして、提婆達多品に登場する小乗の修行者である智積菩薩と声聞の舍利弗が、龍女が現身のまままで即身成仏を遂げたことについて疑念を抱き、智積菩薩は、「成仏は途方もなく長い期間の修業を必要とし、釈尊以外に得るものはない」と述べています。一方、舍利弗は、「龍女は女性であるから、梵天王、帝釈、魔王、転輪聖王、仏になれない」と異議を唱えたことを、仏教学の立場から法華経の再検討が行われ、提婆達多品のテーマは、「釈尊以外には悟りを得る者はいない」と考える智積菩薩と、「男は仏になれる。女は仏になれない」という小乗的な男女感に固執する舍利弗が、成仏できるかどうかを問題にしていることが指摘されています。

「空の立場を主張する初期大乘仏教教団によって、智積と舍利弗の先入観が否定され、彼らを誤った見解から解放させることが目的だったと言えるだろう。誤った見解から解放されなければ、彼らの成仏は不可能なのである。智積や舍利弗が有している執着によって生じる問題が提婆達多品の主題とするならば、舍利弗の持つ女性に対する間違っ

た五つの見識が、五つの煩惱、イコール、五障ということになる」と工藤氏は述べております。

提婆達多品で舍利弗が語っている五障は、舍利弗自身の固定觀念上のものであり、釈尊の教えの五障ではないかもしれません。更に、工藤氏は、「法華經の代表的注釈書である『法華玄義』を著した智顛は、法華經信解品の『汝常になす時、欺怠、瞋恨、怨言、あることなく』という記述の中の欺、怠、瞋、怨、恨を五障として法華玄義の中で挙げている」と述べておられます。更に、「欺、怠、瞋、恨、怨の五障を自覚することで、菩提心が生じ、即身成仏が得られるのだと理解されている。つまり、仏道修行の妨げとなる欺、怠、瞋、恨、怨が五障であると天台教学では理解されていたことになる」としています。

五障の中の三において、「魔王となることを得ず」の「魔王」とは、先ほど、「煩惱の化身」とありましたが、舍利弗は、「女性は煩惱の化身にすらなれない」と言っていることになります。女性は煩惱以下であり、女性の人格を認めていなかったのでしょうか。智積菩薩も、文殊菩薩に、「信ぜじ。此の女の須臾の頃に於て便ち正覺を成ずることを」とあり、「この娘さんが一瞬のうちに正しい悟りを得たなど、到底信じられません」と言っています。

「人格を認められていない女性が仏になることができるはずがない」という固定觀念を覆すためには、どうすればよいのだろうか。その答えが變成男子という、摩訶不思議な現象だったのであるかと考えました。

望月海淑氏は、變成男子せずとも、女身のままにおいて成仏できることが、勸持品に説かれていることを、「法華經における女人成仏に就いて」の論文の中で明らかにされておられます。

提婆達多品第十二では、變成男子、女人成仏が説かれています。次の勸持品第十三では、摩訶波闍波提や耶輸陀羅などの女人に対する記述は、舍利弗や迦葉の男性の仏弟子に対しての授記の表現と全く同様なものであり、一切の娑と婁尼との間には差別がありません。そして、勸持品で「我等亦能於他方国土広宣此經」と彼女らによって語られ、これは菩薩道を行ずるといふ彼女らの宣言となったのであり、變成男子せずとも女身のままにおいて成仏ができるこ

とを語ったものであると論じ、「提婆達多品に説かれる変成男子が法華経の女人成仏論を代表するものである、と言
い切るわけにはいかない」とされております。

更に、提婆達多品について考察し、「この品が、後の時代において付加されたものと見られているところである」と
とされておられます。

まとめとして、龍女が変成男子という姿を現したのは、舍利弗と智積菩薩の「釈尊以外は仏になれない」、「女性は
仏になれない」というバラモン教の影響を受けた固定観念や、女性蔑視、差別、偏見を覆すためであったと思います。
実際に、もし目の前の女性が一瞬にして男性に変身したならば、目の前の奇想天外、摩訶不思議なことに激しい動揺
と衝撃を受けるでしょう。

しかし、凝り固まった先入観や固定観念を変えるには、それほどのことがなければ無理なのかもしれません。提婆
達多品の中の五障は、偏見や先入観を持っている舍利弗にとつての五障であり、それは、梵天王、帝釈、魔王、転
輪聖王、仏身に舍利弗自身がなれないということを示しています。

釈尊の弟子の五十%がバラモン出身者であったともいわれています。釈尊滅後、經典の成立時にインドの根深い女
性差別的なバラモンの教えや社会的慣習、社会的風潮と釈尊の教えが迎合し、經典に付加されてしまったのかもしれ
ません。

一般人向けの仏教解説書には、「ブツダは女性の出家を認めたが、後世に間違つて捉えられる。仏教はインドで初
めて女性出家者を認めた宗教」と書かれています。

提婆達多品からLGBTQについて考えます。舍利弗や智積菩薩が抱えている先入観、固定観念、差別視の煩惱は、
成仏の妨げになるということでもあります。LGBTQの方への差別や偏見が、自分自身の成仏の妨げとなることを意
味します。よって、LGBTQの方への差別や偏見をなくすことは、仏になるために必要不可欠なことであると思

ます。

男らしさ、女らしさ。「男性だからこのようにあるべき、女性だからこのようにあるべき」という習慣や文化、風習などで自然に身につけてきた、これまでの常識、固定観念を通しての考え方や偏見は、知らぬ間に誰かを苦しめているかもしれません。

そして、それは、お釈迦様の御心に反しています。庵谷行享先生は『誰でもわかる法華経』の中で、「人間の小さな知恵など、仏様の悟りの前では、どうあがいても大したことはない」と述べておられます。人間の固定観念、常識などは、小さな知恵にすぎません。LGBTQ当事者、そして、当事者以外関係なく平等に仏様の大慈悲は降り注がれています。そのことに気づくことができる心づくりが必要であるように思います。そのためにも仏教の信心が大切なのだと、改めて感じました。

以上でございます。ありがとうございます。

襄輪 菊岡上人、ありがとうございます。日蓮宗が一番大切な經典としている法華経の中に登場する提婆達多品に焦点を当てられて考え、そこから、私たちが持っている偏見を見据えながら、如行にして越えていくのかというところが、実は大切であります。

実際に、「提婆達多品に出てくるような女性蔑視のような記述は、釈尊の教えの中に、後に取り込まれてきたものであろう」という視点は、確かにその通りだと思われまます。

律蔵に関係する研究の中で、例えば初期の仏教教団の中で、お釈迦さんがお弟子さんを受け入れるときに、形式的な白羯磨形式というものがなかった時代には、ただ「来たれ比丘よ」と述べるだけで教団の一員になった、というのがあります。しかし、この方式というのは、実はバラモンが師弟を受け入れるときの定型のやり方であったという

のが明らかにされてきています。

ですから、仏教というのは、やはりインドの文化圏の中で成立してきますので、インドの伝統的な思想を受け入れているところは、確かにあると思います。

その中で釈尊は、新たな「男性、女性」ということに対して、あまり区別立てをしない宗教を打ち立てていくのですが、いつの間にか、その区別がまた仏教の中に入ってきてしまった。それが、私たちの偏見と言いますか、それを破っていくことの大切さというのを強調してくださった発表だったのではないかと思います。

以上、パネリストの方々のご意見を全部聞かせていただきました。これからは、自由な討論をさせていただきたいと考えています。

はじめに、三原所長による基調報告の中で、「私たちがいつの間にか身につけている無意識の偏見」という言葉がございました。この「無意識の偏見」は、他の先生のご発表でも、近いことが出てきましたし、「偏見」というのは、最後の菊岡さんのご発表でも使われた言葉であったと思います。

いつの間にか、私たちが、身につけてしまう偏見というのはあると思います。それが差別につながっていくもどかと思うのですが、「どうやって差別が生まれてくるのか」が、やはり非常に気になるところであります。「私たちが、いつの間にか身につけてしまう偏見や差別みたいなものは、一体、何に注意をしなければいけないのか」、「実際にはどのように差別として私たちの考え方の中に定着していつてしまうのか」、「どうすればそのような考え方から脱却することができるのか」。これをテーマにして討論ができれば、と思います。

差別に対する問題というの、いろんなところで言及されていると思うのですが、今日お話をいただいた先生方にご意見をいただけたらと思います。

「差別は、どのようにして身につけていくのか」、そして、「それを脱却するためには、どうしたらよいのか」。菊岡

さんが最後、言われたのは、「非常に衝撃的なお話みたいなものを作り上げることで越えていつているのではないか」ということでした。「女人成仏の変成男子説というのは、そういう効果もあるんじゃないか」ということだと思います。

現実には、私たちが社会の中で生きていくときに、いつの間にか身につけてしまう偏見というのは、「どんなふうにして身につけてくるのか」、「一度ついてしまったものを、どうやったら越えていけるのか」という、非常に大きな問題だとは思いますが、各先生方の見解をお聞かせしていただけたらと思っております。

それでは、藤山先生からよろしくお願ひいたします。

藤山 ありがとうございます。やはり、無意識の偏見というのは、男女共同参画の場面でも、ここ数年非常に取り沙汰されている概念です。無意識の偏見は当然、誰にでもあるし、そのこと自体が悪いことではないと思います。ただ、それに関心して気づいて、それが誰かにとってのマイナスになっているのだしたら、そこをどう変えていけるか、というところまで込みで考えないと、ただ単に「あなたには偏見があるから、いけません」というような言い方だと、安っぽい道徳になってしまうと思っております。

偏見というか、その人なりの価値観、これはどうしたって人間について回るものです。ただ、それが「良い・悪い」であるとか、「正しい・正しくない」とか「こうでなければならぬ」という規範と強く結びついてしまうと、そこから外れるものに対する差別や攻撃につながりやすくなってしまふと思ひます。

ただ、やはり、人間は誰もいろんな生き方をしている以上、自分なりの価値観が出てくることは当然で、それに基づいて、「正しい・正しくない」とか「良い・悪い」を判断することだって、当然あると思ひます。

それを、いい大人になったら「絶対化しない」ということが一つキーポイントになるのかと私は考えています。つ

まり、自分の価値は価値としてあるが、「そうじゃないもの見方も、当然、世の中にはある」という前提を持つ。そういう価値観に触れてみる。それを否定しないようにする。ものにもよりけりですが。そうやって、いろんな価値を知る、そしてそれに触れてみる。なるべく理解しようとする。そういう姿勢を持つことで、完全に消えるわけではないですが、少し自分自身を持つ差別的な感情というところから、一歩相対化した姿勢を持つことができるのではないかと私は考えています。

蓑輪 ありがとうございます。確かに、自分の価値は自然に出来てきてしまうのですが、「それが規範と結びつくことで大きな問題になっていく」という視点が、いま出されたと思います。

ですから、それが規範にならないようにしていくための手段としては、他の価値を知る。それから、理解するように努める。これは本当に大切な部分ではないかと思いつつながら、聞かせていただきました。

それでは続きまして、赤川先生お願いできますでしょうか。

赤川 「差別がなぜ生じるのか」というのは、社会学の中でも解けてない大問題かと思っています。

他方で、アンコンシヤス・バイアス（無意識の偏見）という言葉は、近年、すごく言われてきていることなのですが、藤山先生もおっしゃった通り、偏見が完全になくなった世界というものを考えると、これは、あらゆる言葉が意味を持たない世界みたいなものを想定しなきゃいけないかなと思います。

例えば、三原所長がおっしゃってくださった「ブラック」という言葉自体に、特定の負のイメージがある。「そこが、もう諸悪の根源だ」みたいになつてくると、例えば、今まで我々が「黒人」と呼んでいた人たちを、「アフリカン・アメリカン」と言い換えたりする、そういう形になっていくわけです。

ところが、それで、その人たちに對する意味づけが完全に消えるかというところ、そうではないわけです。それを完璧になくそうと思えば、言語を持たない世界みたいなものを想定するしかないのかと思います。

ただ一方で、個人的な話になってしまふのですが、私も三十年ぐらいジェンダー研究とかセクシュアリティ研究に関わってきて、一つ思うことがあります。例えば、身近にその当事者がいるケースがあります。LGBTQじゃなくてもいいです。例えばジェンダーに関して、「この社会は性差別に満ちあふれている」と思う人がいたときには、実は、アライの人たちの方が厳しい非難を受けるということも、私はあるように思います。

だから、「寄り添う」といったところで、「その寄り添い方は不十分だ」という形で、いろんなところで非難されます。そうすると、寄り添うにも実は強い意志の力が必要というところがあって、「そこまで言われるんだったら、もういいや」となりかねない面があります。

もう一つは、権力関係だと思えます。「ある特定の言葉遣いをするだけで正しくて、そうじゃない人たちは間違っている、差別している、偏見を持っている」という、そういう形の議論になっていくことが、アンコンシヤス・バイアスの問題を考えるときに、すごく気になることですね。

「寄り添いたい」と、多くの方は思っています。これは、日本の伝統に遡れば、という言い方をしているのかどうか分かりませんが、そもそも同性愛やLGBTQと現代で呼ばれる現象に関する差別はほとんどなかったと思います。

それでも、結婚できないという意味では、差別があるのではないかという人がいます。究極的には、問題はそこになつてくる。「異性愛者の人たちが持っている婚姻の権利を持っていないことを、どう考えているんだ？」という話になつて、「寄り添いたい」と思っているけれども、必ずしも、それがうまくいくわけでもないということも、この世の中にはいっぱいあります。

実は、大学というのは、まだ恵まれている場所だと思います。藤山先生のような方がおられるので。一番問題なのは、やはりカミングアウトとアウティングの問題だと、個人的に思っています。

つまり、同性同士でいたときに、自分がゲイであるということを告白されるというような場面がありうるわけです。しかし、今はそれをアウティングしてはいけないということになっています。つまり、それを他の人に伝えるのも難しいということになっています。

そうなったとき、大学にはまだ逃げ場があります。藤山先生のような方のところに行けば相談に乗ってくれます。ただ、現実の社会は、そうでもないところがあるので、そこが、今日お集まりの皆様にとっては、より切実な課題になるのではないかなというふうに感じています。

ちょっと逃げのように聞こえるかもしれませんが、克服の仕方は本当に分かりません。個人的には、もちろん寄り添いたいと思っていて、なるべく特定の意味合いを持たないようにしていても、それにも限界があるかもしれないということ自体を、つねに考えていくことしかないのかと思います。

養輪 大きな問題を最初に設定してしまいましたので、先生方にはご迷惑をかけてしまいますが、どうもありがとうございます。ありがとうございました。

「差別のない」と言うのでしょうか、「偏見のない世界」というのは、言葉のないような世界なんではないか」と。でも、これはよく考えてみると、言葉のない世界というのは、仏教が見ている世界のような気がします。そうしますと、次の林先生のお話が、とても面白く聞こえるのではないかと期待してしまうのです。

林先生、どうぞよろしくお願いいたします。

林 よろしくお願ひします。私もすぐに何か答えを出せるようなものではなくて、先ほどの発表では、「異なるものとして尊重する」という態度」と「異なるという認識」について、ちょっとお話をさせていただきました。

「異なるもの」という、異質性や他者との違いを概念化して強調することによって、それを乗り越えて、「みんなそれぞれが違うんだ」ということを理解し合えれば、もちろん、そういう方向性も一つあるのかと思います。一方で、恐らく、仏教的な見方といえますか、先ほど「平等心」という言葉を出ささせていただきましたが、「他者はみな異なる。他者と自分は同じだ」という認識に立って、自分に当てはめて、相手の立場を想像する。そこから他者との良好な関係というのが作られていくという道もあると思います。そのために、想像力が、すごく重要なのかなという感じがします。

先ほど、赤川先生がおっしゃられた「言語を持たない世界」。理想的な、他者との区別をつけないということ突き詰めていくと、全てが無区別な状態、悟りの世界のような感じになるのかとは思いますが、他者と自分、あるいは、世界そのものがみんな等しく見えるという状態です。

そこは難しいとしても、例えばLGBTQというカテゴリーの中にストレートのSも加えてみると見方が変わってくるかもしれません。SLGBTQ。ストレートの人も性的多様性の一つのあり方です。藤山先生が、最初に「みんなが、数直線の中に入る」ということで、「ああ、なるほど」と思った次第です。

そうすると、LGBTQという一つの枠付けをされずに、そういったものも取っ払われて、全てが個性とすれば、そこに壁を作らなくなるのではないかという気がいたしました。

養輪 確かに、私たちは、言葉を使って区別立てをしていきますので、多分これは、私たち人間が持っている本質的な機能だと思いますから、これを抜きにしては、やはり語れないところがあるのだと思います。ですので、どうして

も区別立てをするとか、差別をするというのは、起きてくるだろうと思います。

ですから、「捉えられる対象というのは、元々、区別がないものなのだ」というのでしうか、「そういうものだと
いうふうにつえられる」というのが、とても大切なのかと今の話を聞いていて思いました。

特に、最初に藤山先生が「性の直線上に男性と女性がいる」ということを、属性みたいなものが実は、「男だ、女
だ」というのではなくて、中間的なものも含めて、これが人間なんだ」というような感じで紹介してくださいました
が、「その区別が、実は、はっきりしたものではない」と認識するということも大切なのかなと、いま林先生の言葉
を聞きながら考えておりました。

それでは最後に、菊岡上人、よろしくお願いいたします。

菊岡 先生方、ありがとうございます。

まったく話が飛んでしまうかもしれませんが、先ほど、お昼休憩のときに、テレビをつけたら、髪の毛が肩ぐ
らいまで長い方が出ておられていました。その方の肩書きが「ジェンダーレスモデル」だったのです。その「ジェン
ダーレスモデル」という肩書きのテロップを見て、すぐに私は、「ジェンダーレスだから、この人は女の人なのだろ
うか、男の人だろうか」と、瞬間的に、「どっちなんだ？」という思考が、ぱっと出てきてしまったのです。

今、このお勉強をさせてもらっていて、「これは、どういうことなんだ？ 私の中で、自分の意識の中に、どっち
かに振り分けてしまいたいという感覚があるんだ」ということに、つい先ほど気づかされました。これが、差別が生
まれる、私の中の差別の根本的なものではないか。どうしても「分けてしまいたい」という、心の中にあるもの
がいけないのだと感じました。

先生がおっしゃられたみたいに「脱却するには」と言うと、すごく難しいのですが、私は、先生方から学んで教え

ていただいて、いろいろ奮闘しながら身につけていく立場の者なので、同じように、自分も今まで気づかなかったことは、自分が経験することによって、相手のことも、「ああ、これだけつらかったんだ」とか、「こういうことを、先生、おっしゃられていたんだ」とか、いろんなことを学ばせていただいて、その気持ちができるというのがあるので、同じような立場に自分が経験していくことがすごく大切かと思っています。

蓑輪 ありがとうございます。

菊岡さんの最初の発言ってというのは、大変に興味深い、何か解決の糸口になるのではないかと思います。まさに、自分自身が何かあったときに区別立てしているということ、それに気づくことが最初の大切な点です。多分、藤山先生が言われたことと重なるのではないかと思って、聞きました。

仏教の中で、私たちが世界を捉えるときの認識の構造としては、大体三層ぐらいで考えているのではないかとされています。まずは、心の中に捉えられる対象が描かれて、べたつとつながっているような状態。その上に、今度は一つ一つを区別立てしていくような働きが生じて、一個一個を区別する。その区別した後に、どっかに焦点が当たって、言語が付与されていく。という三つの段階を、仏教は認識の構造として持っていたのではないかと思うのです。

これが、実はいつも自動的に働いてるわけです。意識することなく、もう、私たちが気付いたときには言葉のところまで行ってしまっていて、その言葉が出てくると、そこに固定されていく。そういう感覚なのだと思います。

それが、どっちだか分からないようなものに関しては、恐らく、先ほど菊岡さんが言われたように、「あれ、この人、男なのだろうか、女なのだろうか？」とちょっと逡巡して考えてしまう。でも、それが実は自分たちの心の中に、そういう区別立てをしていく、言葉を付さないと気が済まないような働きが存在しているということに気づかせてくれる、一番のいい例と言うのでしょうか、一つの例なんじゃないかと思いました。

それに気づくことができると、私たちが日常的に無意識にやっていることが意識化されていって、それが根柢のない、ある意味で作られた世界なのだというのが分かってくる。すると、少しずつ離れていけるという印象を持ちました。

さて、いまの問題は、すごく大きな問題ですので、このぐらいにさせていただきます。幾つか考えていきたいところなのですが。いま、LGBTQやジェンダーが差別の問題として出来上がっていますけれども、それを実際に少しずつ解きほぐしていくことによって、恐らく越えていけるのではないかと気がします。

これは、赤川さんの話の中に、「社会的に作られてきたものである。これを変えていくことができるのかどうか」というお話がありました。そのように、社会的に作られてきたものというのは、変えることができるのかどうか。具体的に、そういうふうに変えられたものが今までにあったのかどうか。実際に、それは、何によって、そうなったのか。

赤川先生が話されましたように、江戸時代までの私たちの性差の受け止め方というのは、実はほとんど性差を問題にしていなかった。ですから、ある意味、ちゃんと変えられることなのだろうと思うのですが、「何をするかによって変えていけるのか」という、その点に関して、何かご示唆というのでしょうか、お考えを聞かせていただくとありがたいと思います。

「具体的に、どうすれば変わっていくのか」。日本古代には、お稚児さん信仰がありました。実際に資料を見てみますと、大変に有名なお坊さん、東大寺にいらっしゃった宗性さんという方は、実は男色の記録を自分の資料の中にくさん残しています。「一番寵愛していた稚児が亡くなってしまったときに、実は大変に落ち込んで」というような記録も出てきます。

恐らくそれは、その当時の社会が同性愛というものをほとんど問題にしない価値観だったのだろうと思うのですが、

現在ではいつの間にか、同性愛は本当にとんでもないことのように考えられていますので、何によってそう変わったのでしょうか、変わりうると言えるのかどうか、というか、実際に事例として言えているのでしょうか、「何によってか」というのを、少しお聞かせいただければと思います。

藤山先生、よろしくお願いいたします。

藤山 世の中は、当然変わります。変わらなかつたら、私たちは原始時代のままなわけで、少しずつでも、いい方向とは限らなくても、変わってきたから今日があるわけです。

例えば、このセクシュアル・マイノリティーに関連する話題で言えば、日本ではこの二十年ぐらいで大きく変わっていると思います。少なくとも、私が学生だった一九九〇年代の前半というのは、そもそも「セクシュアル・マイノリティー」という概念もなかつたですし、「ゲイ||HIV」みたいなイメージがすごく強かつたわけですが、今はそういう空気というのは、すごく薄くなっていると思います。

それにはいろんな要素はあると思いますが、やはり当事者や影響力のある人からの情報の発信です。それは、世の中を変える一つの大きな力になりうるかと思っています。

というのは、私の専門領域のスポーツの場面が特にそうなんです。やはり、スポーツというのは、「男らしさ」という価値観と強く結びついていますので、そもそも女性に厳しい社会、男らしい社会。となると、特に男性同性愛者に対するバッシングが、すごく強い場面です。

二〇〇〇年代に入って、アメリカの特にプロスポーツなどで、「自分自身がゲイである」ということをオープンにするアスリートが少しずつ出てきました。特に、その当事者に対して、周りのその他のスター選手であるとか、当時、バラク・オバマ大統領などが「彼のことをサポートする」という意思を示したことによって、スポーツ界全体でも、

男性同性愛者を強くバッシングするという空気がだんだん薄らいできているという流れがあります。

また、今回の東京オリンピックでも、例えばトランスジェンダーの選手が初めて大会に出場したり。三人ぐらいなのですが。それから、開会式のように、MISIAがレインボーのドレスを着て歌を歌っていて、あれが「かき氷によく似ている」と話題になりました。

ああいうふうによく多くの人が注目するような場面で、肯定的な情報を発信していくということで、一つ大きく世の中が変わるということはありうるし、そういう場面で情報を出せること自体、既に日常的な場面で少しずつ変化が起きていることの現れなのだろうと思います。

林 現実には、具体的な課題がいろいろあるかと思っています。例えば、仏教あるいはお寺ということを考えて、結婚式であったり、お葬式であったりです。いろんな制度や考え方というのは、歴史の中で培われてきたもので、それぞれ意味づけがあり、一定の役割や機能というのが歴史の中で持たれてきたと思います。

けれども、仏教は教義も制度も変化し多様化してきた宗教です。ブツダが『大般涅槃經』の中で、最後に、「ささいなルールは変更しても構わない」というような遺言を残したということもあります。実際、律蔵文献を見てみますと、規定された出家者のルールの成り立ちとか、その変更の様子とかを見ていても、当時の世俗社会の情勢や一般の人々の価値観、意識を背景として確立されてきたことや社会の求めに柔軟に応じて修正されてきたことがよく分かります。こうしたことは、仏教教団が社会の変化やニーズによく対応しながら、歴史の中で円滑な社会を作ってきた証拠なのかなと思うのです。

ただし、結婚や死などは当事者個人だけの問題ではなくて、家族とか親戚とか、周囲の人々を巻き込んで、その結びつきの中で行われるものです。ほんとに、いろんな方々のいろんな思いを受け止め調整しながら変えていくことで、

変化というのは起きてくるのだと思います。

荻輪 現実の社会のニーズとか、そういうものに合わせながら、仏教教団が変化してきたというところから考えていくと、「身近なところから少しずつ変わっていくというのが実際だよ」と理解してよろしいでしょうか。

そこが変わることによって、少しずつ社会の方にも影響を及ぼしていくことなのかと聞きました。ありがとうございます。

それでは、赤川先生お願いできますでしょうか。

赤川 そうですね。これについては私も三十年以上悩んでいる問題です。

と言いますのは、ジェンダー研究の中では、早い時期から「社会ってのは変えることができる」とされてきました。特に、「性差っていうのは社会的に作られたものであって、それは、教育や様々な制度によって変えることができる」ということが、ある意味当然視されていて、今でも東大のジェンダー研究の先生方は大体そういう前提で語るわけです。

しかし、「ほんとに、じゃあ、人間に性差がないのか」と言うと、それは別の問題です。端的に言って、生殖能力があるかないかというところで、性差はれっきとしてあるわけです。

ところが、そういうことは言語化できないような状況になっていて。特に、理系の方と話すとき、そういう話になります。「男女に性差ってあるのに、なかったことにされてる」という。そういうふうにいる方も、東大の学生にも少なくない数でいると思います。

他方で、セクシュアリティ系の議論を、ここ三十年ぐらい見ていると、やはり特に初期の頃、それこそ藤山先生

がおっしゃってくださった九〇年代の頃は、「同性愛っていうのは、生まれつきなんだ」と。「これは遺伝子に規定された生まれつきのもので、変えることができない。だから、自分たちの存在を認めてくれ」と、そういう主張だったんです。

トランスジェンダーに関しても、ある時期まで、そうだったと思います。つまり、「性同一性障害」という形で、「自分たちは病気なので、性別適合手術、性転換手術を受けさせてくれ」という、理屈だったわけです。

だから、そこにジェンダー系の議論を突然持ち出して、「いやあ、君の性的指向は社会によって作られたものだから、変えることができるんだ」なんて言っても、意味がないわけです。

そういうところから、私の研究はスタートしていますので、この問題については、どちらの立場もありうる。「変えることができる部分と、できない部分がある」ということを前提に議論しないと、難しいことになると思っています。

もう一つは、要するに、「誰を変えるのか」という話です。つまり、ジェンダー系の議論の方によくありがちなのですが、「性差は社会的に作られたものだ」。そこは私も社会学者だから認めます。だけど、そのために他者の意見、偏見を変えるという話になると、少し違和感が残ります。

一方で、セクシュアリティの議論で言うと、同性愛が典型的ですが、「おまえが同性愛者であることは社会的に作られたんだから、それは変えることができるんだ」となると、これもマズい。簡単に言えば、脳の中にいろいろ葉を打って、異性愛者にしてしまおうとかいうようなことが議論されるような時代だったわけですね。

そう考えてくると、「変える対象が何であるか」というところが結構大きな問題で、他者だけ変えようとする、他罰的な社会にならざるを得ないと思います。

社会学者は、本来は自分を変えることをまず目標にしなくてはいけなくて、制度の話はその次であるべきだと思う

のですが、しばしば、社会運動の中ではそうなつてはいないという矛盾があるような気がします。そういうところを指摘するしか、今の私にはできません。

蓑輪 どうもありがとうございます。大変に示唆的な、「変えられるものと変えられないものとの双方があるという前提の下に、議論していくべきだ」ということ。確かに、その通りだと思います。

岩波の『広辞苑』に記されている「男性」と「女性」が、どういうふうに定義されているかというのを追いかけた人の記事を読んだことを思い出しました。「男性」というのは、「女性を妊娠させることのできる性」というような定義が出てきていたと思います。これは、確かに性差として考えると、歴然として存在しているところなのだろうなと感じました。

ですから、これは多分変えられない。いわゆる身体を持っている属性というのは、多分もう変えられないが、それをどのようなものとして見ていくかという、恐らく社会の価値観というのでしょうか、通念みたいなところに関しては、変えることができるのではないかと。これは、確かに歴史的にも大きく変化してきているところがあると思います。

「何を変える対象にするのか」というのは、やはり常に意識しておかなければいけないところだと思いますので、葛藤する部分もたくさんあると思いますが、大事な視点ではないかと思いました。

では最後に、菊岡上人、お願いいたします。

菊岡 私は実体験ばかりなのですが。このあいだ、高速道路を車で走っていましたら、レインボー色のトラックが通りすぎたんです。そのとき、私は全然なんのトラックなのか分からなくて、でもカラフルできれいなトラックだと思います。

いました。でも、ここに「ひとりじゃないよ」と書いてあってですね。帰ってから調べたら、当事者の方々が岡山市内の企業とトラック会社とタッグを組んで走らせているトラック。「虹トラ」というものだそうです。

やはり、藤山先生や林先生がおっしゃられているみたいに、ふと、こういうものがあると、ぱっと目にして、気になったら、今はすぐ調べられるので、そういうところから、一般の人たちが、LGBTのことについて関心をもって入っていくことによって、一人一人の気持ちが変わっていくと思えました。

というところから、小さな一歩だけそのうち大きく広がって、社会が変わっていけばいいなと感じさせていただけいております。

蓑輪 ありがとうございます。今の例も、具体的などころで大変に面白いです。トラックに書かれていたもの、実際に目にしたものから入っていきける、というようなことなのだと思うのですが。

今の話を聞いていて、確かに、そういうキャンペーンみたいなものを行うことによって、少しずつ変わっていくというのはあるのだろうと。これは、先ほど赤川先生が言われたように、「何を変えていくのか」って言ったら、「LGBTに対するものの方を変えていく」ということだと思えます。そういう意識を、当事者の方たちに対する私たちの無意識の偏見を、キャンペーンみたいな形で、それを越えていこうということをご皆さんに理解してもらおう。

今の話を聞いていて、実は、日本で大々的なキャンペーンを打って、人の価値観が変わったという例で、面白いものがあつたのを思い出しました。

それは、日本の武士の人たちは、昔は捕虜になると、「命を助けてもらったんだから」というので、自分たちが持っている情報を、敵方というのでしょうか、相手の方に教えるというのは、「決して間違ったことではない。おかしなことではない」と考えていたのだそうです。

ところが、これが大変に大きな問題になったのが、日清戦争ですかね。捕虜になった日本人が、その感覚で敵方の軍隊の方たちに、持っている情報をみんなしゃべってしまふ。それを、当時の軍部は「これはいけない」というので、人々の価値観を変えようとして、大々的なキャンペーンを張ったのだそうです。「生きて捕虜の辱めを受けず」というキャンペーンを張って、「とにかく捕虜になるよりは死んだほうがよい」という考えで、七年か八年ぐらいで、人々の意識が大きく変わった。それ以降の人たちは、いつの間にか、「生きて捕虜の辱めを受けず」というのが一般的な価値観になった、というようなものを読んだことがあります。

やはり、いろんなところで、そういう啓蒙活動のようなものをしていくというのは大事な手段なのかもしれません。ただ、もう一つ問題になるのは、実際にLGBTQを意識していなかった時代というのが、今日、赤川先生が紹介してくださった古代のところだと思うのですが、これが意識化されるというのは、よいことなのかどうか。それから、意識化したことを学んでいくということが、一方で起きてしまふ。つまり、「差別が学習されていく」というのは、昔から、よく言われていることだと思ふのですが、差別であるということを知ることによって、自分が差別する側に回ってしまうというのも、現実によく起きることだと思います。

ですから、「学習をする、学ぶ」ということは、時と場合によっては、諸刃の剣かという気がするのですが。その辺りで、防がなければいけないのでしょうか、気をつけなければいけない点というのは、どういうところにあるか。これも、最後に一言、二言で結構なのですが、ご意見を聞かせていただければと思います。

学ぶことによって、それを越えていけるというときに起きてくる副作用みたいな感じだと思ふのですが、「差別を知ることによって、差別する側に回ってしまうという、よく起きてしまうことを、どうやって越えていけるか」という点で、ご意見を寄せていただければと思います。

藤山 これは非常に大切な問いで、私たちのように、特に人の前に立つてものを教えるという立場にある人間が、常に気をつけていなければいけないことだと思います。

そういう意味では、私が先にお話ししたことの繰り返しになるかと思いますが、自己の持っている価値観というものをしっかり認識すること。そして、それがほんとに絶対的なものなのか、ということを相対化すること。それから、時代に応じて、常に更新していくと言うのでしょうか、ちゃんと自省的に自分の価値観というものを見る態度というものが、一つ必要になってくるのかと思っています。

そういう意味で、最近気になっているのは、岡崎体育という人の「おっさん」という歌です。後ほどYouTubeで聞いていただければと思いますが、私自身は、常にこういう感じで生きていければいいと感じています。

蓑輪 ありがとうございます。大切なところですね。

赤川 今のお話は、例えば、差別に関して、「寝た子を起こすな論」というのが、昔からあったと思います。それにとどこまで関係するか分かりませんが、日本の社会の特徴ということで考えると、基本的には、少なくともLGBTQに関して、そんなに大きな差別はなかったと思います。

欧米で、「日本ほどLGBTQの人がテレビに出ているような社会は、ない」なんて、今でもよく言われます。あの意味では、寛容さを保っていますし、それはある意味、日本の良き伝統として、「元々差別のない社会だったのだから、そこに戻そうよ」という言い方をしてもいいとは思いますが。

ただ一方で、これは現代社会の特徴と言ってもいいのかもしれませんが、自分たちのアイデンティティとしてセクシュアリティを考える人たちが大量にいるという社会の中で、無視はできなくなっています。個人的に言えば、セク

シユアリティの問題というのはプライベートなことだと言うこともできて、「別にカミングアウトしても、されなくとも、それで付き合い方が変わることはないよ」という人はたくさんいると思います。

しかし一方で、自分のプライベートなことであっても、「社会として承認してほしい」という願いを持っている人たちがたくさんいるときに、私たちの社会も対応を変えていかざるを得ないだろうということなのかと思います。

ですので、これも一般的な回答があるわけではなくて、一つ言えるのは「寝た子を起こすな論」というのは難しいのだろうと。「実際、寝た子が起きてしまっている状態の中で、どうしたらいいのか」という問いに移っていかざるを得ないだろう、と思うということです。

ありがとうございます。

蓑輪 確かに、今、寝た子が起きてしまっている状態だなと思いますので、その視点から考えていかなければいけないでしょうね。

では、菊岡上人、最後、お願いいたします。

菊岡 深く知るにしろ、浅くこのことを知るにしろ、何か差別とか偏見というのは、結局、自分の中に出てきてしまうものだと思います。私はお坊さんとして、自分の心のために手を合わせて、常に仏様の教えをいただいで、自分の心がふらふらしないような、差別が起こらないようにしていただいているという日々でございます。

なので、以上が私の感じているところでございます。

蓑輪 どうもありがとうございます。それは、まさに、宗教者の方たちが、「まず自分の身で、きちんと示していく」

ということなのでしょね。

「率先垂範」という、戦前にはやったような言葉がありませんけども、自らが率先して、その姿を見せていくということ、変わっていくものがある、ということなのではないかと伺いました。

予定していた時間を少し過ぎてしまいました。この問題というのは、当事者の方たちの身体的な性を変えることは、多分できない。それを、どのようなものとして見ていくのかというのは、私たちのもの見方だと思いますので、この部分は、寝た子が起きちゃてるわけですから変えていける、そういう努力を、今しなければいけない状況にあるのだろうと感じました。

ところで、LGBTQの問題を、この機会に取り上げたいということになった一つの理由というのは、実際に、今、日本のお寺さんで、お檀家さんたちの死と向かい合って、死に寄り添っているのだと思うのですが、実際にそういう方たちが出てきたときに、どういう戒名をつけるのかという、具体的な問題というものもあるということからでした。そういうところを解決していくのは、また別の知恵が必要なのかと思うのですが。

そこで思ったのは、やはり、男性や女性というような視点が入らない信者さんの名称というのは、歴史的には存在しているんです。実は唐の時代に、在家の信者さんたちの翻訳語として、「近くに仕える」というので「近事」というのがあるんです。「近く」に「事」と書いて「ゴンジ」。それから、もう一つが、「近く」に「住んで」「近住」と書いて、ニュアンスは、「身近にいて仕えている」。多分、「身近に住んでサポートしている」というようなニュアンスだろうと思うんですけど。

こういう「近事」「近住」という言い方は、いわば、性別が入らない名称なのではないかと思えますので、新しい戒名として、つけちゃうということもありうるということを、最後に、余談として話させていただきました。

それでは、これで終了したいと思いますですが、菅野主任、それから、三原所長、何か一言ありますでしょうか？

菅野 はい。では私の方から先に。

本日は、長時間にわたりまして、先生方、ありがとうございます。それから菊岡さん、どうもありがとうございます。また。

あまりにも示唆が多くて、まとめるようなことは申し上げられないかもしれませんが、印象的な言葉をいくつか申し上げて感想を述べさせて頂きたいと思います。

藤山新先生が仰った「寄り添う力」というものがありました。この言葉はとても心に刺さりました。というのも、「寄り添う」という言葉に対して我々宗教者は例えば「ああ、寄り添うね」という感じで軽く受け取る人が必ずいると思います。「ああ、そういうのは分かっている」とか「もう、やっつてる、やっつているしな」とか、あるいは「そんな聞こえはいいけど曖昧な言葉で云われてもね」とか軽くせせら笑う感じって、我々僧侶にもしかしたらあると思います。でも「寄り添う」とは本来そういうことではなくて、確かに一見分かりやすい言葉なのですが、宗教者が他者の悩みや苦悩に寄り添うことは実は相当な覚悟が要ることであるということをも自分自身の反省を含めて、改めて強く思いました。

また私たちは「男性」とか「女性」とか、LGBTQ+であったり、肉体的性差や精神的性差を感じながら生きている、理屈は分かっているところから逃れられずに生きざるを得ない、そのどうしようもなさがあるわけです。性差が複雑化している中でLGBTQ+についてもカミングアウトする自由とカミングアウトしない自由とか、気軽にカミングアウトできる世界とカミングアウトしなくとも普通に生きていける世界とか、目標とするとこちらも様々だとは思いますが。その中で赤川学先生の仰る「アイデンティティを獲得する自由」と「アイデンティティに縛られない自由」というお話があり、大変共感いたしました。この言葉も今回心に刺さるものがあつたのですが、さらに左右両極端の原理主義を越えて同性愛賛成・反対論者お互いの妥協点を探していくという考え方、ここには仏教徒として理解

しやすいものであると感じました。

また林先生のお話の中でありました、スッタニパータの「生きとし生けるものは幸せであれ」という祝福の言葉、これは「すべての生きとし生けるものが自己の生に対して幸せであると感じる」ということで、これが理想であると思いましたが、そのために私自身がどのような心持ちでいるべきなのか、これも考えないと気が遠くなりそうではあります。律蔵にある逸話として誘われてしまったら男でもついて行ってしまう僧侶がいたという、そういうことも起こりうる現実の世界で、スッタニパータに示されるような「一切衆生は生きているだけで素晴らしい」という理想を持ちながら、そこにどのように近づいていくかという課題があります。例えばジャータカは本来、釈尊の前生譚で修行による徳を高めていく生の歴史ですが、その中で、釈尊はLGBTQ+どころか、人類を超えて虫やら動物やら人間以外のものにも生まれ変わり続けるわけです。生まれ変わる中で、多様な生と性を体験し、その苦しみと愛おしさを我がものとする中で仏に近づいていったとも考えられると思います。林先生のお話の中でオウムの逸話がありましたが、これはいわゆる種族が異なっていたとしても愛情を伝えたいという気持ちはあり、こういう中で多様な生や性のあり方もあったかもしれません。

私たちもそういう流れの中にあるのかもしれませんが、そういう流れの中で仏に近づいているのかもしれませんが、ですから道のは果てしないのですが、ジャータカのように無数の生を生きることにより、その者の生と性を真摯に受け止める中で「生きとし生けるものは幸せであれ」という思いが自然に表れてくるのではないかと思います。これが藤山先生の仰る「寄り添う心」の在り方であると感じましたし、そのためには固定観念やら時代一般常識とか偏見に対しても「なぜ私はそう考えてしまうのか」と様々に考えを巡らす時間をいただいたと思います。ありがとうございます。

三原 今日、大変長い間、ありがとうございました。

今、「寄り添う」ということがありますが、私、家内と結婚して四十五年が近づいておりますけれども、お互いに寄り添って生きていくということも大変な覚悟が要ると思っておりますので。他人に寄り添うよりも、これからは、妻と夫がお互いに、どういうふうに寄り添っていくのか。目前の問題で大変だろうなと思っております。

今日は、ほんとうに、蓑輪先生、ありがとうございました。私が最後に感じたことというのは、先生のご指導で、この五年間ぐらいになりますかね、マインドフルネスの問題から、ずっと今でも少しずつやっているわけなんですよ。そのときに、先生のお話の中で、「とにかく、最初に、どういう判断が起こってくるか」ということを、やはり一番に気がつくようになってまいりました。ですから、やはり苦しみというのは、イメージとか判断で生まれてくると。

今日は、ずっと、そういう問題が底流にあったような気がするのですが、ともかく、自分の判断に身を任せてはいけない、分別に身を任せていってはいけないということを、毎朝、静かに座ったりして考えるようになったんです。

そういう点では、ほんとうに、いろんなイメージが氾濫している現代社会でございますけれども、まず、イメージにとらわれない自分の生活というものを、しっかりとやっていったらどうだろうかというようなことを、今日、蓑輪先生、それから、他の先生方のお話を伺いながら感じた次第でございます。

ほんとうに、今日は、どうもありがとうございました。また今後とも、よろしくお願いいたします。